

平成 29 年 6 月 11 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370359

研究課題名(和文) 18世紀後半フランスの言語文化空間における読解性の構築

研究課題名(英文) The Transformation of Episteme since 1750s in France

研究代表者

阿尾 安泰 (AO, YASUYOSHI)

九州大学・言語文化研究院・教授

研究者番号：10202459

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：これまで18世紀の作家、思想家を対象とした研究は多く存在したが、そうした作家、思想家がどのような基盤のもとに活動を行ったのかをみつかったものは、多くはなかった。特に文学、思想という領域を横断して機能しているような認識の枠組みを射程に収めようとするものはさらに少なかった。領域横断的な探求を続けていく中で、18世紀後半において、特にフランスで演劇、絵画などの分野で視覚的な枠組みにおいて、大きな変化が生じたことが判明した。そして、その変容を言語によって記述することを通じて、新たな言語表象システムが誕生していった。

研究成果の概要(英文)： We have so many studies on the authors and the thinkers of the 18th century. But there are very few works which try to study globally the epistemic basement of these authors and thinkers.

Pursuing the multidisciplinary research, I found the grand transformation of the frame of knowledge in the various fields. This transformation causes the appearance of the new system of language representations.

研究分野：18世紀フランス文学思想

キーワード：18世紀 フランス ルソー 言語文化 読解

1. 研究開始当初の背景

(1) 18世紀研究は全般的に進展をみせていた。幅広い分野を扱う総合的研究と個々の作家、思想家を対象とする個別的研究も深まっていた。

(2) ただし、この研究の拡大と深化は、相互に成果を参照しあい、交流をはかるといふ機会が多いとは言えないという問題点が、進展にもかかわらず存在した。

(3) こうした問題点を考慮して、18世紀研究をさらに充実した形で押し進めるためには、この二つの研究方向を結びつけ、そこから新たな可能性を探求する必要があった。

2. 研究の目的

(1) 相互に影響を及ぼし合うことのない総合的研究の広がりや個別研究の深まりを関連づけ、双方の研究成果を有機的に活用して、新しい領域を開くことが求められた。

(2) 18世紀の言語文化研究において、幅広い分野を貫いて活用される重要な概念を選択し、それが個々の作家活動等において、いかなる機能を果たしているのか、領域横断的に調査することを目指した。またそうした概念を支える知の基盤を探索することとした。

(3) そうした探求はすでに、ミシェル・フーコー、ジョナサン・クレーリー等が試みていた。しかし、フーコーは、古典主義のエピステーメを強調しようとするあまり、17世紀と18世紀の差異に十分な配慮を払うことはなかった。また、クレーリーは、19世紀における認識の新しさの方に力点を置く中で、18世紀の示そうとした可能性が十分な形で把握されることはなかった。この両者が見逃している18世紀の言語文化の枠組みの特殊性を考察していくこととした。

3. 研究の方法

(1) 18世紀の言語文化の特性を把握するように努めた。17世紀、18世紀を区別なく連続的に論じるような視点を避けた。18世紀の特殊性に注目することにした。こうした特殊性をいう視点がなければ、18世紀は、19世紀からはじまる新たな歩みを準備しただけの過渡的な時代として、重要性が認められない恐れがある。現在から過去を判断して、位置づけようとする遡及的な方法は避けることとした。遡及的な方法では、本当の意味で現代を問い直すことはできない。

(2) 調査対象を、従来行われてきているように、文学、演劇、思想などの限定された領域だけにしぼることはしなかった。18世紀という時代においては、様々な領域が交流し合

い、新たな知の枠組みを作ろうとしたことを考え、すでに規定された分野を想定しての分析は避けることにした。そしてこの時代の言語文化を考える上で重要な概念である「タブロー」を見いだした。この概念が、領域横断的に文学、演劇だけでなく、医学のような様々な分野で使われている事を明らかにして、そうした交流によって構成されていく、18世紀の知の枠組みの総体を明らかにしようとした。

4. 研究成果

(1) 18世紀においては、美的経験に関する考察は、深まりを見せていった。単なる個人的な体験の問題ではなく、美をいかに理論化していくかが問われるようになっていった。デュ・ボス師などをはじめとして、美的な経験に関する考察が深められ、前の時代とは異なる展開を示そうとしていた。

(2) 感情的契機を言語による秩序化のプロセスに組み込んでいこうとする傾向が深まる中で、1750年代以降重要な概念となっていくのが、「タブロー」であった。もともと絵画等の分野で用いられていた語であったが、それが18世紀独自の演劇的な美学を展開する中で強調されて、用いられていった。

(3) 17世紀の古典演劇に比べると、18世紀演劇について語られることはこれまで多くはなかった。しかし実際は、18世紀は演劇とくにその美学的な側面において、多くの考察が行われた時代であった。この演劇における新しい概念の影響は、文学などの分野にとどまらず、幅広い領域に及ぼうとしていた。

(4) この概念の重要性は、可視性を介して論理性、情動性をむすびつけることができることにあった。語ろうとする対象を、ある情景の中に圧縮していくのである。その情景は静止画というよりも、動きを潜在的に内蔵していて、見る者はその動きも含めて、場を読み取ることが求められる。「タブロー」が示す方法とは、視覚化された対象を、それが引き起こす様々な情念とともに、記述していくなかで、まとまりのある全体として提示するというものであった。情念を語りながら、それを論理の枠の中でおさめることが可能となった。力動的な言語表象システムが登場することになる。

(5) こうして見ることと語ることが共同して、安定した言語表象システムが形成される。見ることは語ることであり、語られることは見られることによって保証されなければならない。可視性と論理性に支えられる言語表象体系が、18世紀において確立する。全ての事象は明確に言語化された命題となるとともに、その存在は明かな徴とともに視線の

とに姿を現さなければならない。真なる命題として可視化されてはじめて、知の体系の中に位置を占めることができる。こうした明証性を求める動きは、たとえばコンディヤックの哲学的、論理学的著作に見ることができる。またラヴォアジエの化学的な著作なども、記号の明証性を求める動きの中から理解することができる。ルソーが物理学よりも、化学の方に関心を抱いたのも、当時の化学に期待された明証性への可能性と無縁ではない。またこの体系がはらむ情動性に注目したものとして、ティソなどは医学的著作などにおいて、人々への説得にそうした図式を利用したりした。

(6) ただこうした可視性と論理性がむすびついた枠組みも次第に限界に至ろうとする。可視性を越えようとするものが出現していく。その限界点が「崇高」である。対象が通常の知覚を越えるような大自然の相貌に人々は驚愕を覚えながらも、ひかれていく。その限界状況の中で、なお対象を捉えようとどりよくするのである。しかし、その先に、さらに可視性とは異なる次元に属する抽象的な要素が現れてくるに及んで、事態は決定的な転機を迎えていく。具体的な生物の活動をこえた「生命」、個別的な事件、事象をこえた「時間」などが、考察の対象となる中で、これまでの枠組みでは、位置づけが難しい事態が生じていく。そして、文学などにおいても、これまでは観察力を高めて、見えがたいものを可視化していくことで、その力の強さ、確かさを示してきた。ところが、そうした解読を逃れざる根源的に「不可視」のものを主題とする作品が、モーパッサンなどによって発表されるようになってくる。こうした新たな動きの中で、19世紀以降、新しい知の枠組みが問題となっていく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

阿尾 安泰、
18世紀の風を求めて 言語文化空間論
構築の試み、言語文化論究、査読あり、
No.37、2016年、pp.63-78

阿尾 安泰
恐怖という効果 可視性から考える 18
世紀の知の枠組み、言語文化論究、査読
あり、No.35、2015年、pp.1-13

〔学会発表〕(計 3 件)

阿尾 安泰
ルソーからみた『フランケンシュタイ
ン』、日本シェリー研究センター、

2016年12月3日、東京大学本郷キャン
パス

阿尾 安泰
Recherches épistémologiques et
théâtralité, 国際18世紀学会、
2015年7月30日、ロッテルダム
(オランダ)

阿尾 安泰、奥 香織、馬場 朗
啓蒙と演劇(ワークショップ)、日本
フランス語フランス文学会、2014年
10月26日、広島大学

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
<http://www.flc.kyushu-u.ac.jp/~ao/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

阿尾 安泰 (AO Yasuyoshi)
九州大学大学院言語文化研究院・教授
研究者番号： 10202459

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者 ()